平成12年度郷土史講座資料

平成12年度
若狭地方における発掘調査の成果

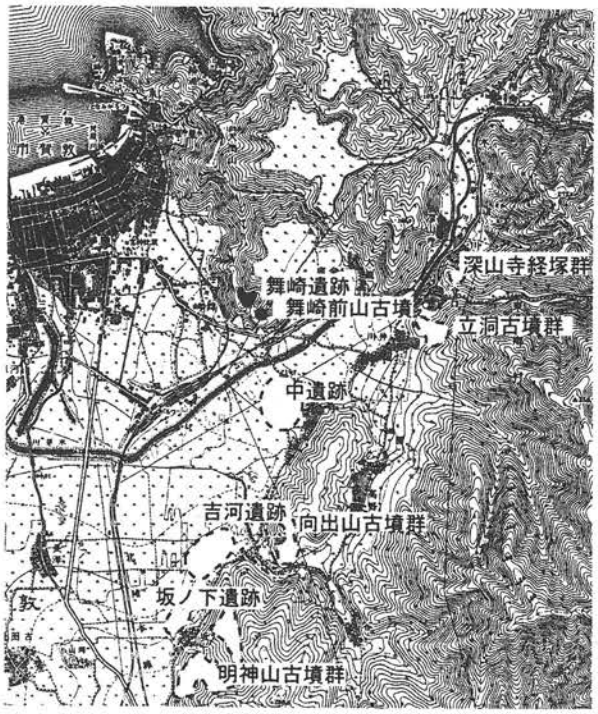
平成１３年３月１８日（日）

福井県立若狭歴史民俗資料館

遺跡位置図

舞崎遺跡の調査

敦賀市教育委員会文化課　学芸員　　中野　拓郎



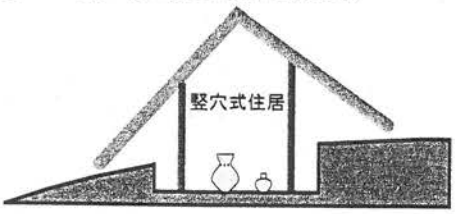
遺跡の位置　（５万分の１）

舞崎遺跡は天筒山南方尾根、標高約95mに位置しています。広さが約1,100㎡のあまり面積のない痩せた尾根上に、平安時代の経塚、４基の古墳、そしてその下に弥生時代中期までさかのぼる集落跡が発見されました。

幾度となく利用された場所のせいで、弥生時代の遺構はかなり壊されていましたが、それでも住居跡が４～５棟、磨製石斧を納めた穴や、屋外で複数回火が焚かれた部分などが検出されました。

このように、生活を営むにはきわめて不便な山の上などに造られた集落は「高地性集落」と呼ばれています。一般的には環濠集落と同じように、防御のためにわざわざ不便な場所に造られた集落といわれていますが、この舞崎遺跡のように、住居が少なく、しかし長期間利用され、また鉄の武器などがまったく見つからないとなると、戦闘のための「山城」のような集落とは、性格が異なるようです。

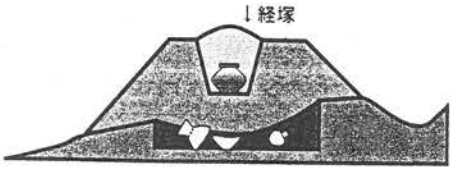
約2000年前　舞崎にムラが営まれる

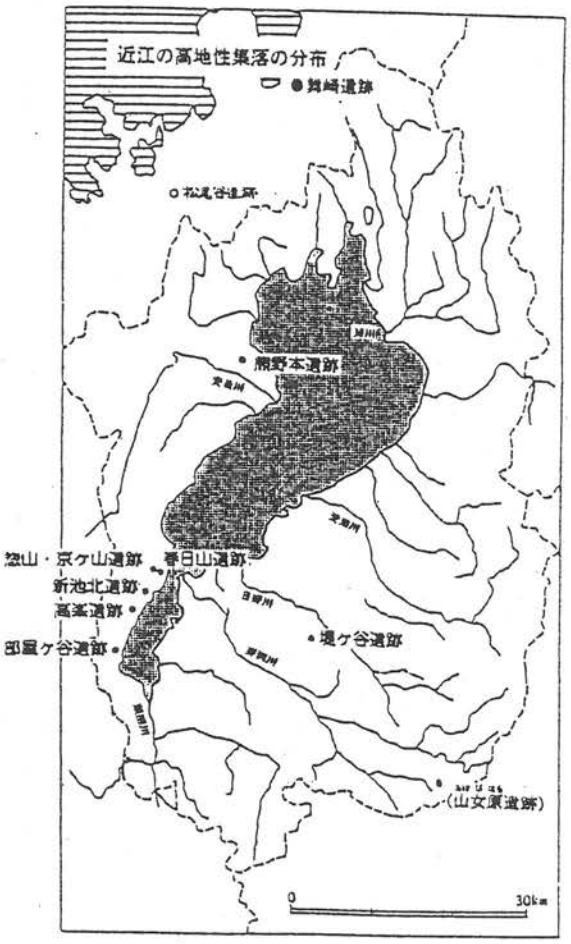


約1900年前ぐらい　ムラが終わる

約1600年前　古墳が築かれる

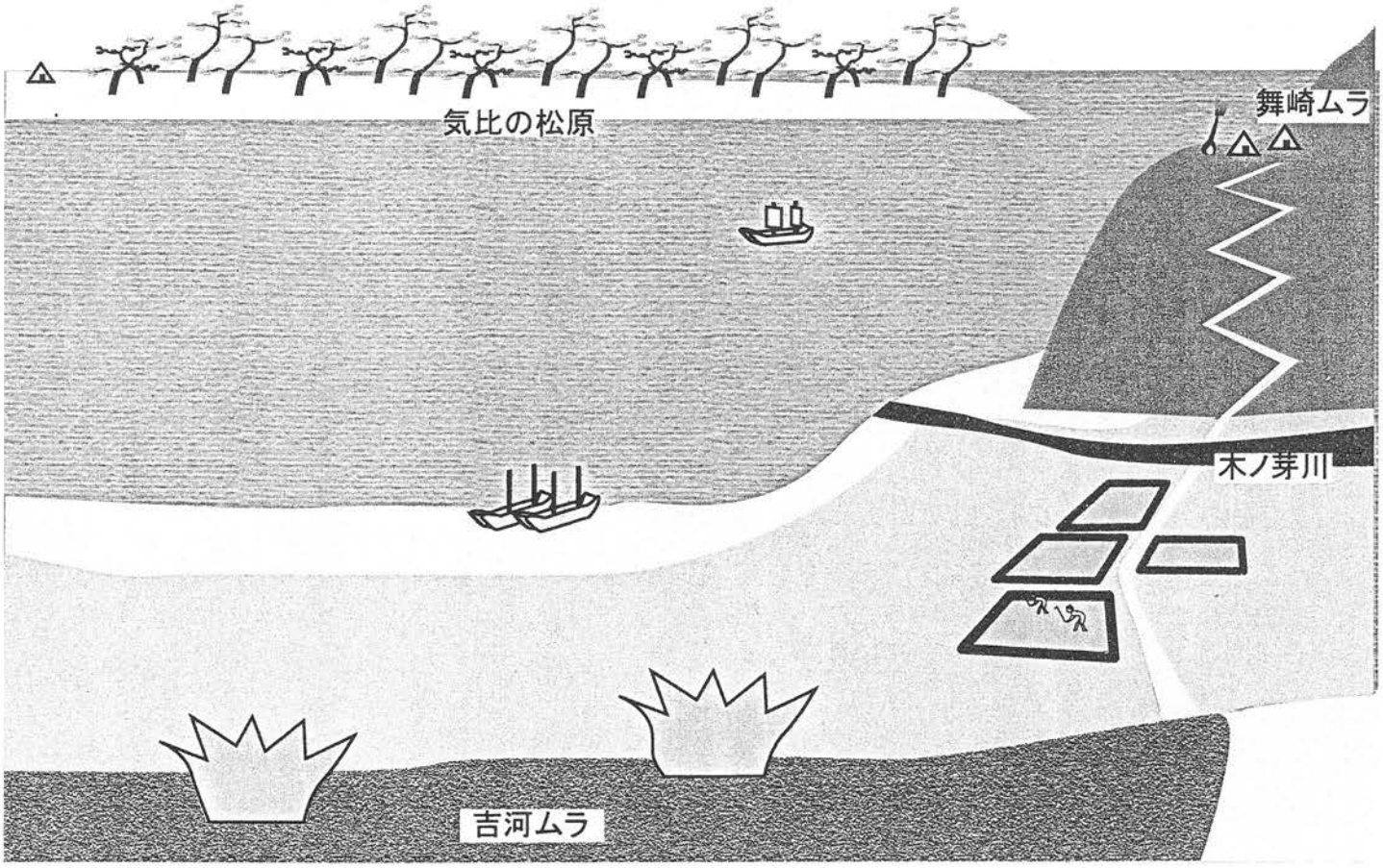
約800年前　経塚が築かれる





出典：「シンポジウム：倭国大乱と近江の高地性集落　資料
－日本海と畿内を結ぶ軍事拠点・新旭町熊野本遺跡－」より（一部改変）

吉河ムラからみた当時の敦賀

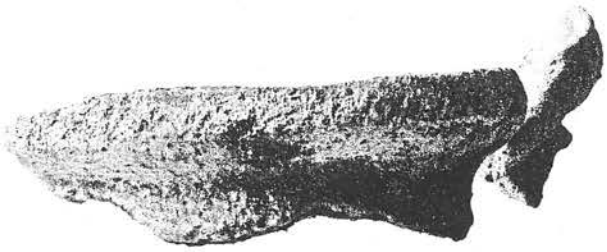


上のイラストを見ていただくとわかるように、敦賀市街地は当時内海になっていました。そして気比の松原がちょうど「天の橋立」のようになっていて、外海とを隔てる堤防の役割をしていました。このころの敦賀は天然の良港として、また北陸地方に向かうときの玄関口として、重要な位置を占めていました。

弥生時代中期を過ぎると日本海側の人々は海路を使って、近畿地方の人々は陸路を通って、さまざまな交流が活発になってきました。しだいに嶺北では山陰地方の土器の形が流行するようになりましたがその点敦賀は滋賀や、京都北部の土器の形が大部分を占め、どちらかというと近畿地方の文化圏に入ります。

舞崎遺跡で見つかった他の地域産の土器

大阪産の土器
チョコレート色の粘土を使っている



滋賀産の土器
白くてきめの細かい粘土を使っている

舞崎遺跡　現地説明会用　資料

敦賀市教育委員会が市内舞崎町で行った舞崎遺跡の発掘調査の結果、次のことがわかりました。

1．舞崎遺跡において、県内最古、弥生時代中期末（今から約 2000 年前）の「高地性集落」が発見されました。

遺構は竪穴式住居４～５軒、焼土坑（火をたいた穴）が確認されました。出土品には弥生土器のほかにも磨製石斧（磨いて成形した石製の斧）、石鏃（石のやじり）、石製紡錘車（糸車）、敦賀市内の吉河遺跡でも出土した大型の石包丁などがあります。出土した土器のなかには滋賀県の土器の特徴である「受け口状口縁」をしたものが多数あり、また畿内から運ばれた土器も含まれていました。これらの出土品から、2000 年前の敦賀での文化交流の様子や、畿内地域との結びつきの深さを知ることができました。

2．古墳が築かれていました。

高地性集落がつかわれなくなって、しばらくしてから古墳が築かれました。この古墳は舞崎遺跡から 30mほど下ったところにある舞崎古墳よりも古いものです。古墳の主体部（人が葬られていた場所）から鉄器が出土しました。詳しいことは現在も調査中です。

3．さらに舞崎遺跡では、平安時代末（約 800 年前）の「経塚」が2基発見されました。

この経塚はすでに盗掘の被害にあっていましたが、それでも和鏡２面をはじめとして刀や中国から輸入された陶磁器などが出土しました。

その他、古墳時代後期後半（約 1400 年前）、平安時代初頭（約 1200 年前）の土器なども見つかり、それらの各時代をつうじて、舞崎遺跡は信仰の対象になっていた場所であったことがわかりました。

１に関連して

「高地性集落」とは、弥生時代中期から後期末にかけて、平野などの生活しやすい場所ではなく、不便な丘陵上や段丘上に営まれた高地性集落です。

高地性集落には１．見晴らしのよい丘陵、山頂に小規模なムラをつくる。２．丘陵、段丘上に溝をめぐらせて（環濠）、やや大規模なムラをつくる。の２タイプがあります。舞崎遺跡は１のタイプで、外敵からムラを守るとか、戦争の際の拠点といったものよりは、見張りもしくは通信のための集落と考えられます。実際、舞崎遺跡で武器などの出土品はありませんでした。

この見張りもしくは通信（のろし台）的な集落は、滋賀県で多数見つかっています。弥生時代中期末の時期では、琵琶湖の西側を沿うようにして分布していて、畿内から日本海を結ぶ「近江―日本海ルート」の通信網があったのではないかという説もあります。もしそうであれば、敦賀湾を見下ろし、陸路の木ノ芽峠越えの道をにらむ舞崎遺跡は、「近江―日本海ルート」の北端になり、連絡、通信の発信源であった可能性があります。

2に関連して

舞崎遺跡には４ヶ所の四角い盛り土があり、そのなかでも一番大きな「３号墳」から鉄製品と思われるものが出土しました。この古墳の主体部はおおがかりな石組みなどは使わない木棺直葬（木の棺をじかに埋めるもの）と考えられ、古墳時代でも古い時期のものと推定できます。このほか詳しいことはまだ調査途中です。

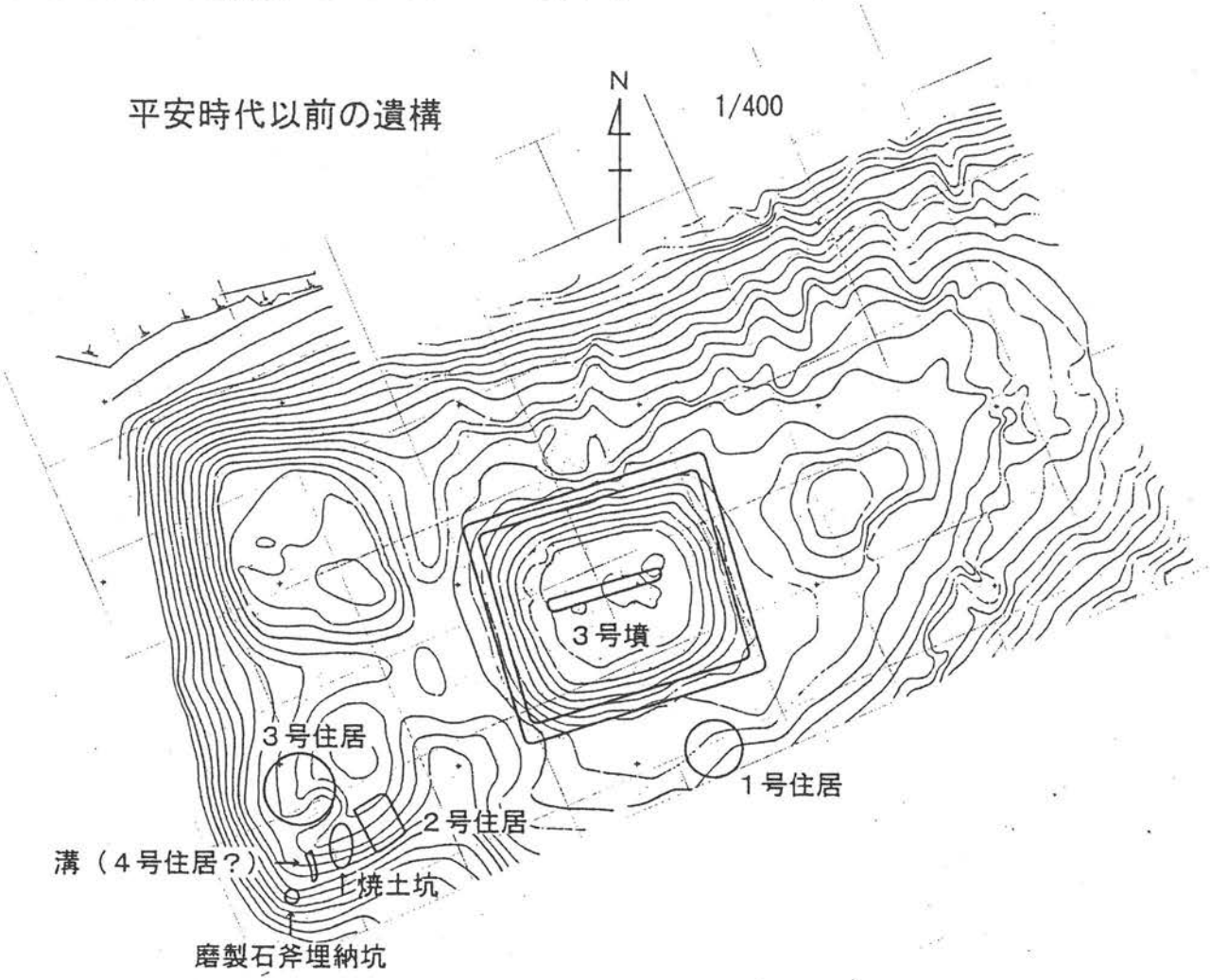
3に関連して

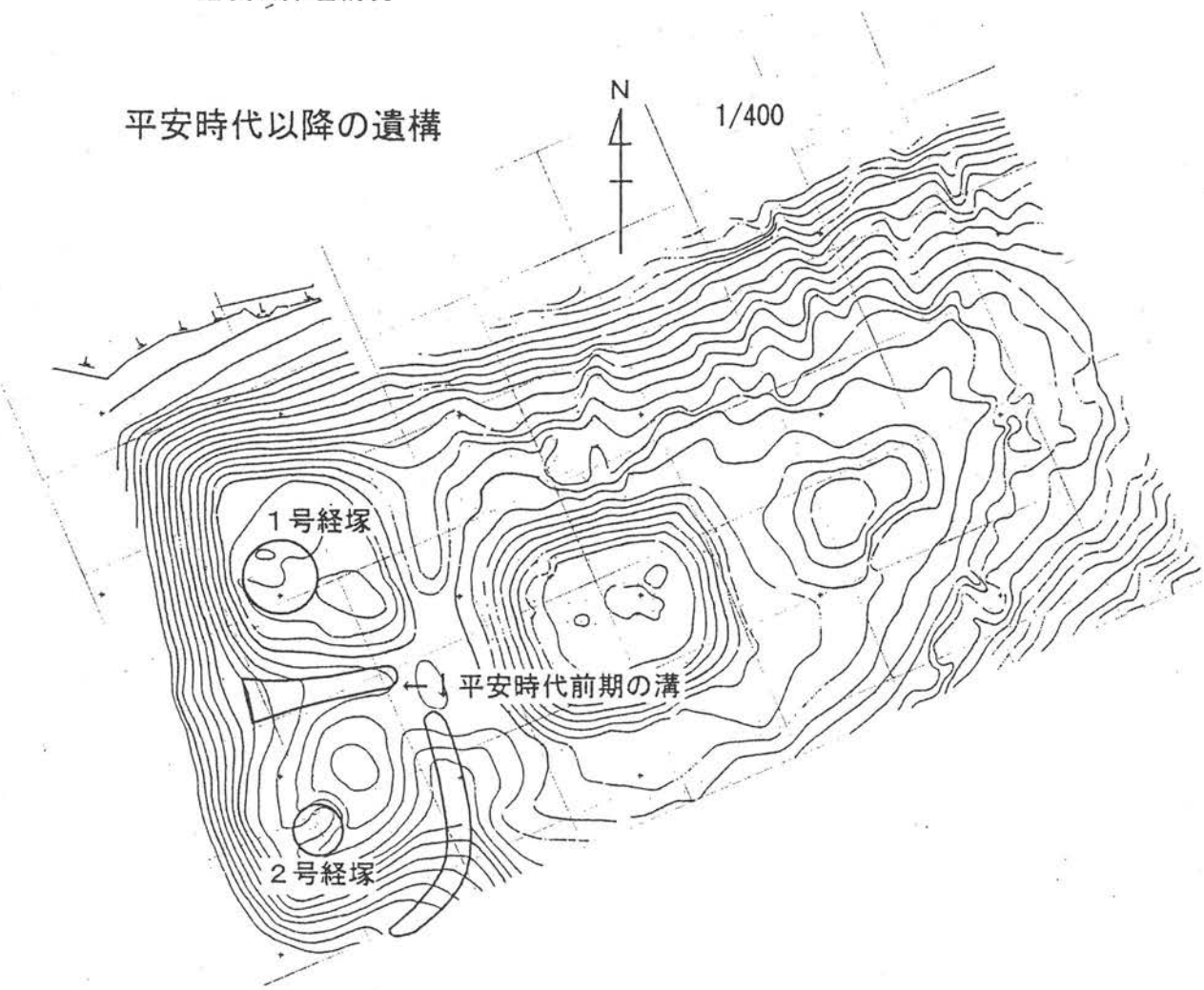
舞崎遺跡で見つかった２基の経塚は、その両方とも経筒（経巻を入れていた筒）が失われていました。しかし経筒と一緒に納められていた日本製の鏡や刀、輸入品の青白磁製の皿や合子（あわせ口の小型の器）などが見つかりました。

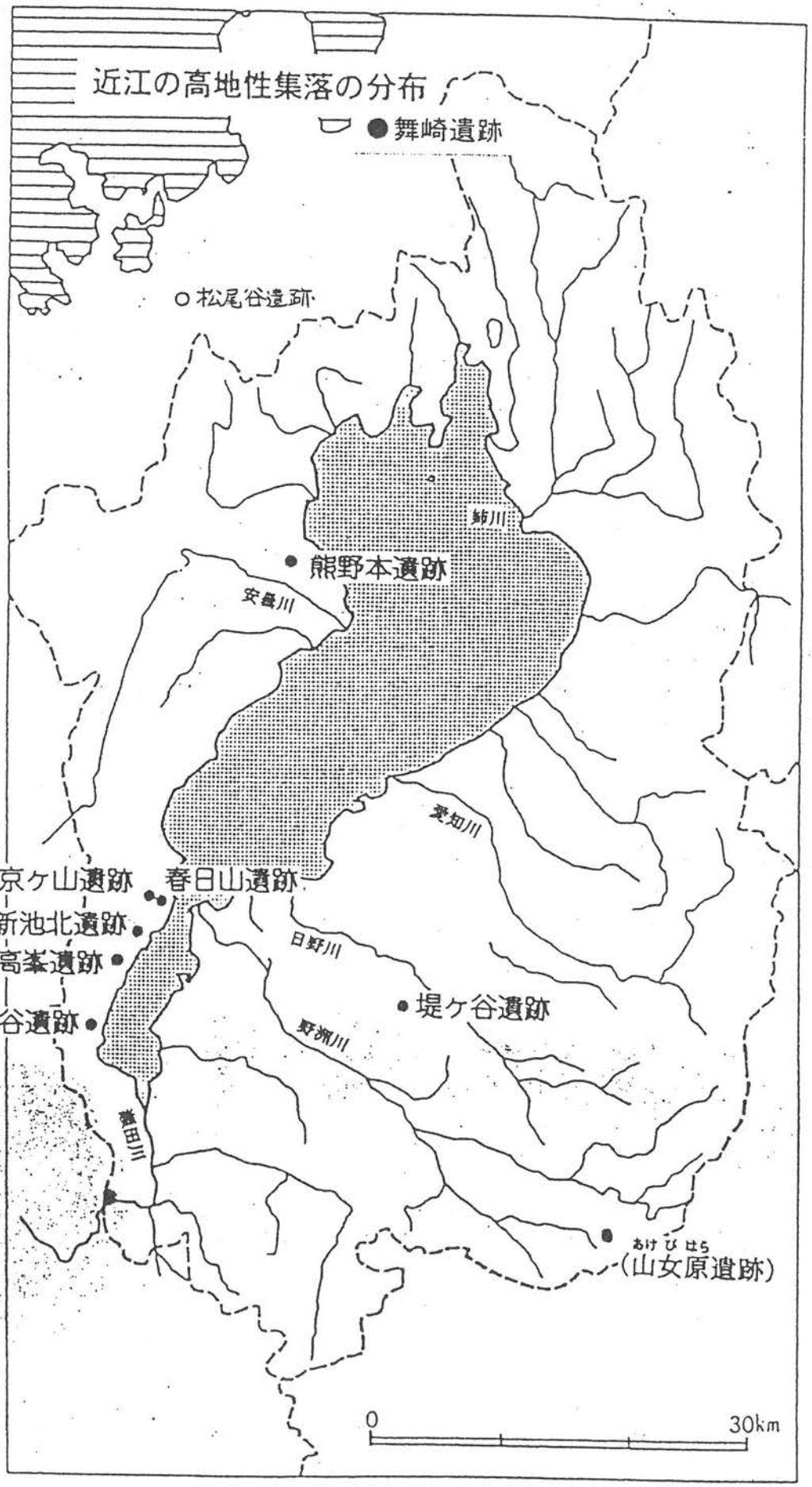
＊この「経塚」とは、平安時代のころから築かれるようになった宗教遺跡で、法華経などを写経した経巻を金属製の筒に入れて土中に埋納するものです。当初は弥勒菩薩があらわれる未来まで仏のおしえを残していくためのものでしたが、だんだんと時代が経つにつれ、経典を保存することよりも写経することで功徳を積む方の目的が主となっていきました。そして鎌倉時代に入ると写経した経巻はしだいに寺院に納められるようになり、経塚は築かれなくなっていきました。

年代	舞崎遺跡	敦賀市内のその他のおもな遺跡
西暦　0年	高地性集落が営まれる	吉河遺跡
200年		中遺跡
400年	舞崎遺跡内に古墳が築かれる	立洞2号墳が築かれる 舞崎古墳、向出山1号墳が築かれる
600年	この時期の土器出土、祭用？	衣掛山古墳群が築かれる
800年	この時期の土器出土、山岳寺院？	葉原に須恵器を焼く窯が作られる
1000年		深山寺に経塚が築かれはじめる
1200年	経塚が2基築かれる	
1400年	天筒山城の南端として利用される	
		敦賀城が築かれる

舞崎遺跡　遺構位置図(5/27現在)







出典・「シンポジウム：倭国大乱と近江の高地性集落　資料

－日本海と畿内を結ぶ軍事拠点・新旭町熊野本遺跡－」より（一部改変）

MEMO

遺　跡　名	興道寺遺跡
所　在　地	福井県三方郡美浜町興道寺
調査原因	零細事業者建物新築工事
調査期間	平成12年8月16日～平成12年9月 13 日
調査主体	美浜町教育委員会
調査担当者	松葉竜司
調査面積	約500㎡
時　　代	奈良時代

興道寺遺跡範囲

調査の概要

興道寺遺跡は耳川左岸の中位河岸段丘上に立地します。

興道寺では以前から弥生時代から中世までの多くの土器の散布が知られています。平成9 年度には今回の調査地の東隣において約1200 ㎡の発掘調査が行われ、奈良時代を主体とした集落跡が確認されています。

調査によって、これまでの調査例と同様、奈良時代の集落遺跡であることが分かりました。主な遺構としては、竪穴建物跡、柱穴、土取り穴と思われる土壙などが検出されています。

【竪穴建物跡について】

調査区の南端にて1 棟検出されました。東西、南北ともに約4 mの正方形プランからなります。建物跡の主軸はほぼ磁北と合致します。建物跡床面東側には粘土を張りつけた貼床が認められます。床面に4 本の主柱穴、建物壁際に沿って建物内外に柱穴が認められました。

また、建物内北東隅に造り付けられた竈遺構と、その南側に角礫の平面を上方に向けて配された集石遺構を内部施設にもちます。

竈遺構は、船底状に浅く掘り窪めた掘り方をもち、煙道部は建物外東側に向かって地山層である明黄褐色土を掘り抜いて構築しています。最奥部は緻密な粘土を用い、径 10cm 程の礫を充填しながら煙道部に接続させる形で構築しています。最奥部右側では川原石を縦位に据え置き、下部を粘土で固めていました。右袖部は径1～10cm 程の礫を芯として粘土・黄褐色土で叩き締めながら構築します。対照的に左袖は石材を芯として用いず、粘土・黄褐色土で叩き締めながら構築します。上部構造は既に失われており不明です。

集石遺構は、角礫の平坦面を上方に向けて配しています。遺構下部には土壙状の掘り込みがみられ、その埋土は焼土・炭化物・灰を含んでいます。礫に明確な被熱状況は認められませんが、廃棄・再構築の循環を考えて、現段階ではこの集石遺構を石敷炉と想定している。なお、この遺構の左側に床面直上で3 点の礫が見られ、かまど遺構の左袖から集石遺構背後に至るまでの範囲にて地山層を掘り残したテラス状の高まりが認められることから、作業場を備えていたものと考えられます。

床面や住居跡に埋もれた土からは奈良時代の須恵器や土師器、製塩土器といった土器が破片の状態で出土しています。

【その他】

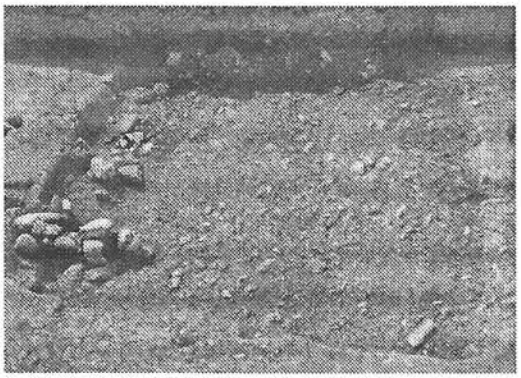
掘立柱建物跡を構成したものと思われる柱穴、土取り痕と思われる土壙などが検出されています。

【まとめ】

平成9 年度調査によって確認された2 棟の竪穴建物跡から製塩土器が出土しており、海岸部から数キロも離れた当地の建物跡から製塩土器が出土することは異例なことです。今回の調査成果を含めて、これらの竪穴建物跡は住居というよりもむしろ工房のような使われ方をした可能性があります。

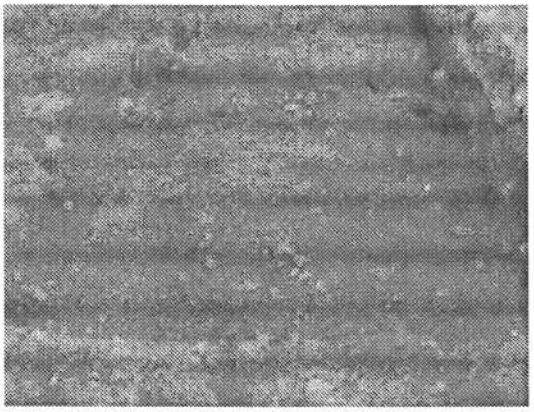
奈良時代の集落跡が平成9 年度調査地から今回の調査地（西方）まで展開していたことを示します。興道廃寺に関わったかなり大規模な集落が存在したことが伺えます。

調査区西半

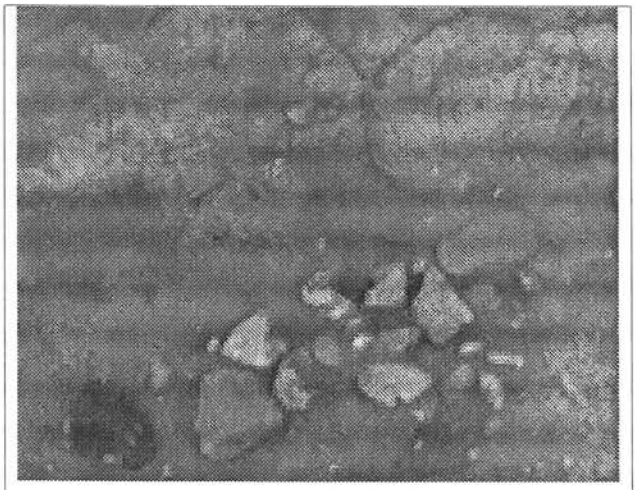


竪穴建物跡（北から）

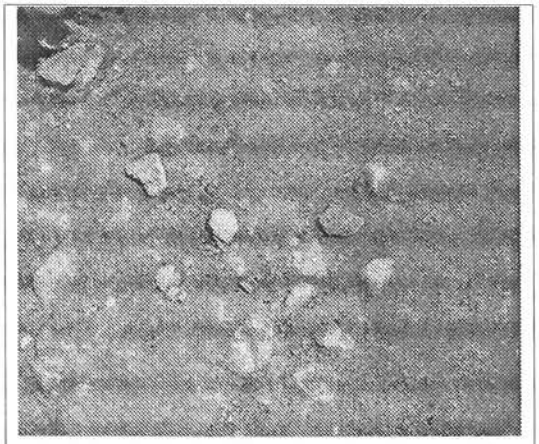
竪穴建物跡竈遺構



竪穴建物跡（西から）

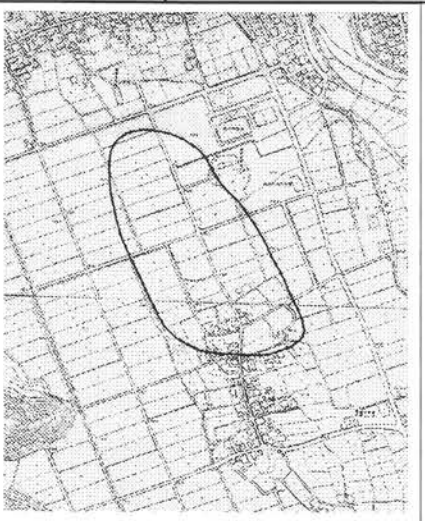


竪穴建物跡集積遺構



竪穴建物跡床面遺物出土状況

遺　跡　名	興道寺古墳群
所　在　地	福井県三方郡美浜町興道寺
調査原因	農道拡幅工事
調査期間	平成12年10月11日～平成12年12月28日
調査主体	美浜町教育委員会
調査担当者	松葉竜司
調査面積	約500㎡
時　　代	古墳時代後期(6世紀)、鎌倉時代(13世紀後半)



興道寺古墳群範囲

調査の概要

興道寺古墳群は耳川左岸の中位河岸段丘上に立地します。興道寺では昭和 50 年代の圃場整備事業によって多くの埋没墳が確認され、そのまま破壊されたことが知られています。現在、2 基の古墳（御前塚、田中塚）が現存し、付近には塚原、狐塚など古墳に関わる小字が残されています。

調査によって、3 基の埋没古墳と柱穴、土壙、旧河道などが検出されました。

【埋没古墳について】

3 基の埋没円墳（Ａ－ＳＺ１、Ａ－ＳＺ２、Ｂ－ＳＺ１）を検出しました。

Ａ－ＳＺ１は、推定径が 18m の円墳で、墳丘が大幅に削平され、周溝が残存するのみでした。埋葬施設は不明ですが、墳丘内の地山層に現代に掘り込まれたとみられる土壙からやや大ぶりの石材がゴミと共に廃棄されており、この古墳の埋葬施設であった横穴式石室の残骸である可能性があります。この土壙は調査前の水田畔下に相当し、土地改良時の「古墳を壊して畔に隠した」という証言に合致することから、現代における古墳の破壊が想定されます。なお、地山層直上から耳環（金環）が出土しており、古墳破壊に伴い副葬品が散在したと思われます。

Ａ－ＳＺ２は、Ａ－ＳＺ１の周溝の外側に取り付くように築造されています。残存する墳丘から推定径5 m の円墳であることが判明しました。この古墳には埋葬施設が良好な状態で残存します。埋葬施設は追葬を意識せずに造られた（竪穴系）小石室と呼称されるものです。石室の規模は全長約 1.6m、幅約 0.4m、高さ約 0.4 mで、石室の床には玉砂利を敷き並べています。石室の側壁は川原石を2 ～3 段積みして構築され、天井石が一石残存していました。石室内からは、6 世紀末に属する須恵器杯が1 点副葬されています。

Ｂ－ＳＺ１は、推定径が 14m の円墳で、墳丘が大幅に削平され、周溝が残存するのみでした。周溝内から須恵器（はそう・広口壺・提瓶）6 個体が据え置かれるように出土しています。古墳の祭祀儀礼に関わる可能性があります。

【柱穴】

柱穴から出土する遺物から中世から近世に掘り込まれた柱穴であることが判明しました。柱穴には 13 世紀後半に属する遺物が含まれています。

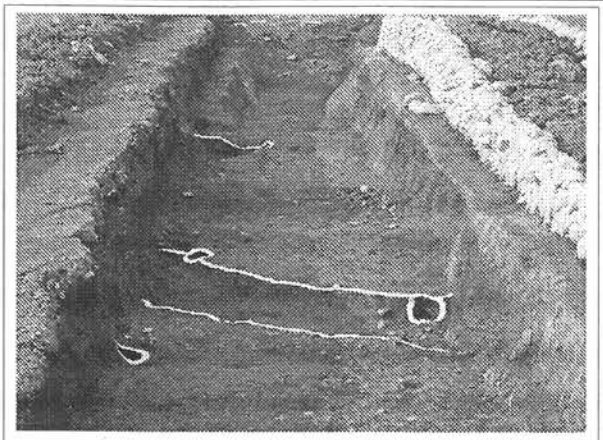
【その他】

近世の土取り痕、現代まで流れていた旧河道などが検出されています。

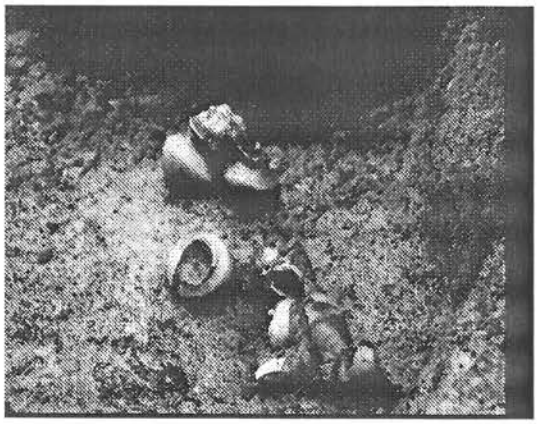
【まとめ】

興道寺古墳群では過去に十数基の古墳が確認されていましたが、今回の調査で確認された埋没古墳3 基を含めて、多くの古墳が存在した可能性があります。

また、良好な状態で確認された小石室は、近年調査例が増加している傾向にありますが、古墳時代後期に造営された古墳に普遍的にみられる埋葬施設である横穴式石室に比べて、その調査例は乏しい状況です。

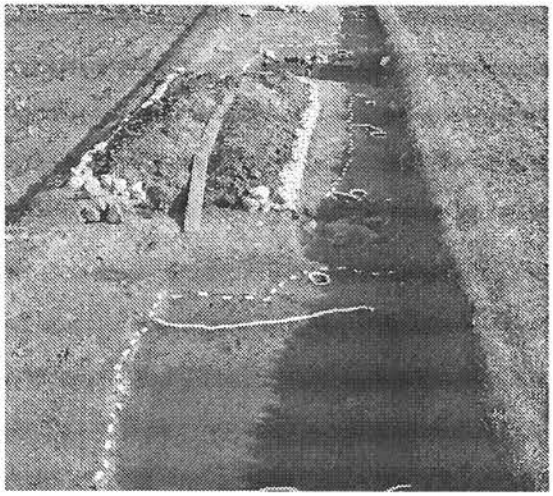


Ｂ－ＳＺ１ 検出状況

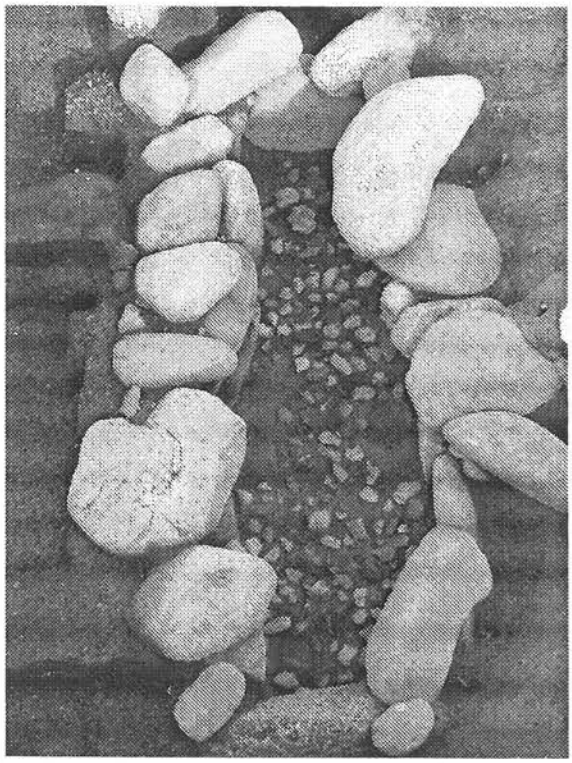


Ｂ－ＳＺ１ 周溝内遺物出土状況

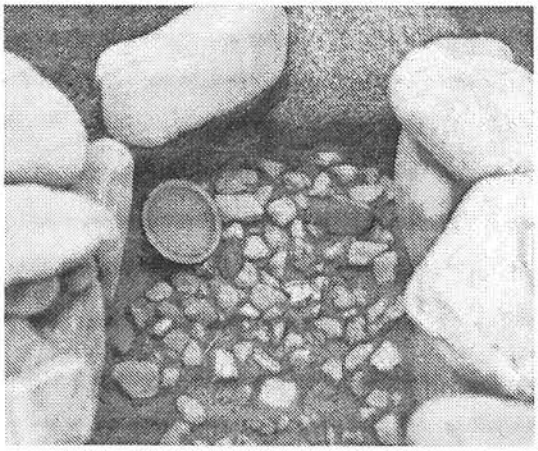
Ａ－ＳＺ２ 検出状況



Ａ－ＳＺ１ 検出状況



Ａ－ＳＺ２ 小石室検出状況



Ａ－ＳＺ２ 小石室遺物検出状況

しもけんじょういせき

下見定遺跡

所　在　地：小浜市遠敷４９号下見定
調査原因：遺跡確認調査
調査期間：平成12年7月1日～9月14日
調査主体：小浜市教育委員会
調査担当者：西島伸彦、下仲隆浩
調査面積：約600㎡
時　　代：平安時代(約１，０００年前)

遺跡位置図(Ｓ＝１/２５，０００)

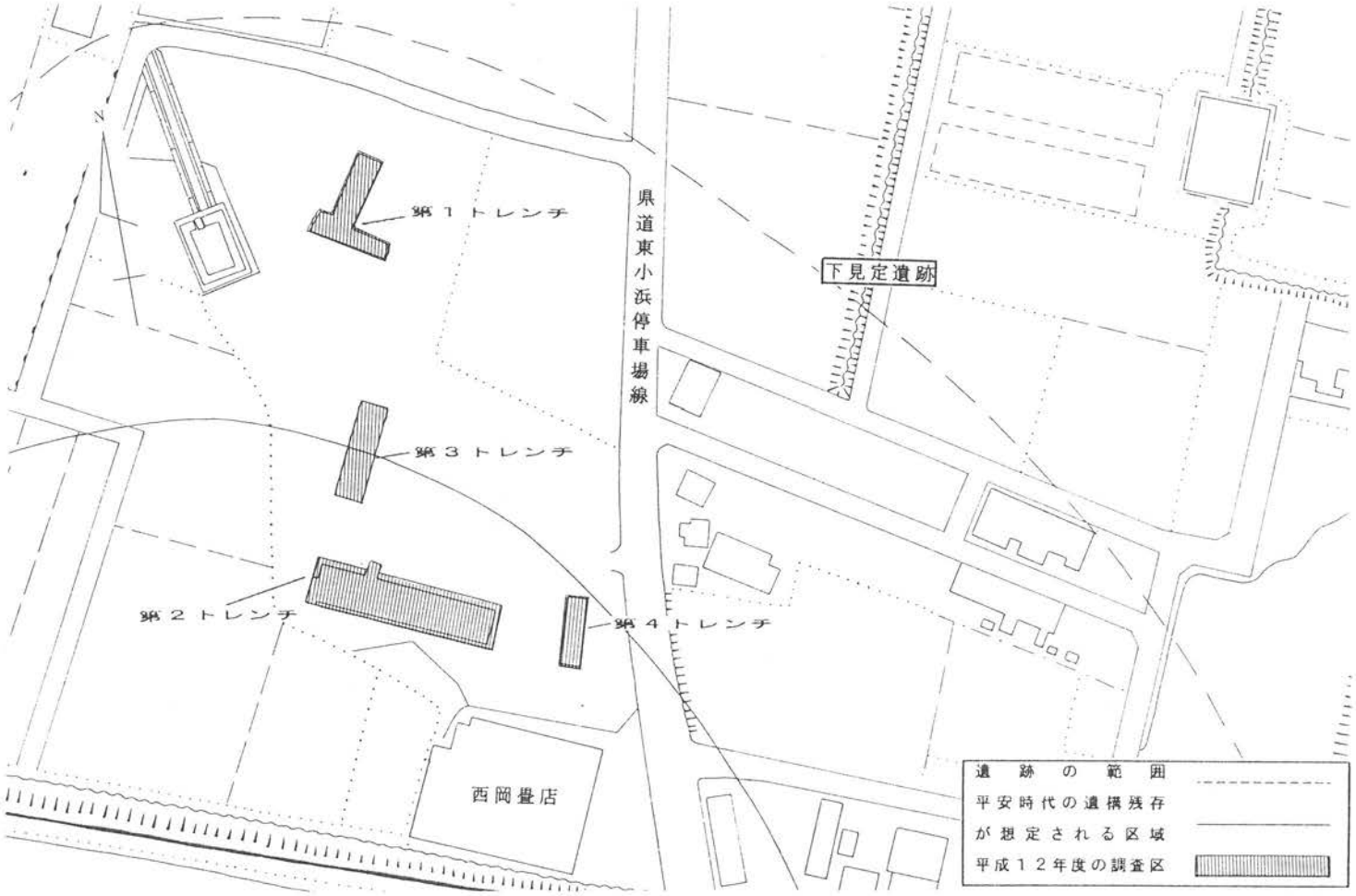
調査の概要　下見定遺跡(07115 福井県遺跡地図番号)は、遠敷川の形成する扇状地の端部に位置しています(図１参照)。周辺には若狭国分寺跡や、皇朝十二銭のひとつ「神功開宝」が確認された西牟久遺跡などが認められます。また、遠敷地区から松永地区にかけては若狭国の国府が置かれていたと考えられることから、重要な遺跡の存在することが予想されました。今回の調査は下見定遺跡の北辺を確認するため、トレンチを４本設定して調査を行いました(第２図参照)。なお、トレンチ番号は調査した順になっています。以下、その概要を述べたいと思います。

遺構　第１トレンチでは、河川跡が検出されました。また周辺からの流れ込みと思われますが、古墳時代と奈良時代の遺物が検出されています。このトレンチは北側へ緩く傾斜していることから、南側からの流れ込みによるものと思われます。第３トレンチ及び第４トレンチでは溝、土坑、小穴等の遺構が両者とも主に南側から検出され、北側からはあまり検出されませんでした。対して第２トレンチからは多くの貴重な遺構が検出されました。遺構は竪穴式住居跡４棟・井戸１基等です(図３参照)。住居跡の規模は一辺３．５～４．５ｍで隅丸方形をしています。しかし建物としては小規模であること、主柱穴が不明瞭で炉など日常生活に不可欠な施設が認められないことから、集落に付随する工房や作業小屋のような性格を持つ建物と考えられます。井戸の規模は長径２ｍ×短径１．８ｍの楕円形をしています。

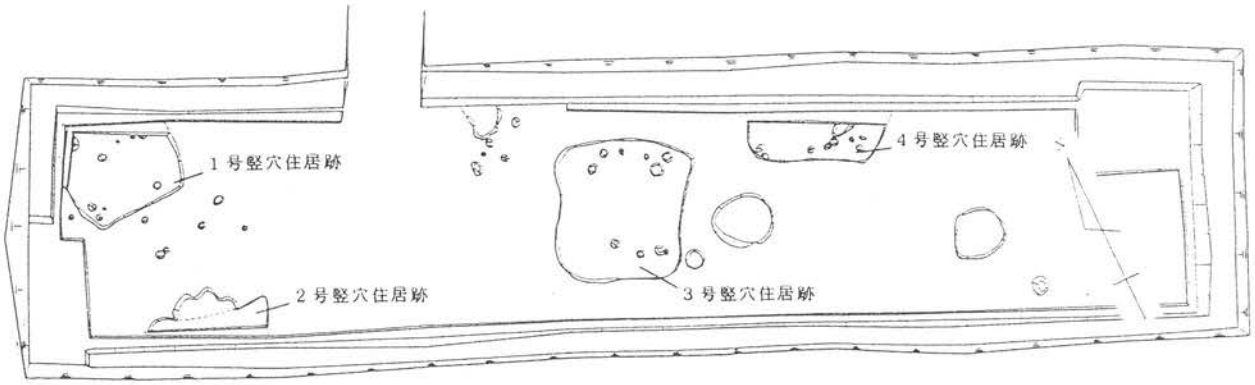
遺物　検出遺物の主なものは土器・陶磁器類で、これら遺物の大半は第２トレンチの竪穴式住居跡、特に３号住居跡及び４号住居跡から検出されました。土器では須恵器(杯身・椀・甕等)、土師器(椀)、施釉陶器(緑釉・灰釉陶器椀)が検出されました。陶磁器では輸入陶磁器（青磁・白磁碗等）が検出されました。その他の遺物として竪穴式住居跡からではありませんが、下駄や井戸枠材等の木質遺物が検出されています。遺物は１１世紀代のものと考えられ、それらが検出された竪穴住居跡も、その検出状況から同時代のものと考えられます。

まとめ　今回の調査において平安時代の竪穴式住居跡を検出できたことは、若狭地域の当該期における人々の生活を究明する上で貴重な資料になるものと思われます。第１トレンチで河川跡が検出され、第３・第４トレンチでは主に南側において遺構が検出されています。このことから調査地の北側には遺構はあまり存在していないものと考えられます。対して最も南側の第２トレンチにおいて竪穴住居跡が検出されており、当該遺跡の南側に公的な遺構の存在する可能性が考えられます。(西島　伸彦)

第１図　調査地周辺図　（Ｓ＝１／２５，０００）



第２図　調査位置図　（Ｓ＝１／１，５００）

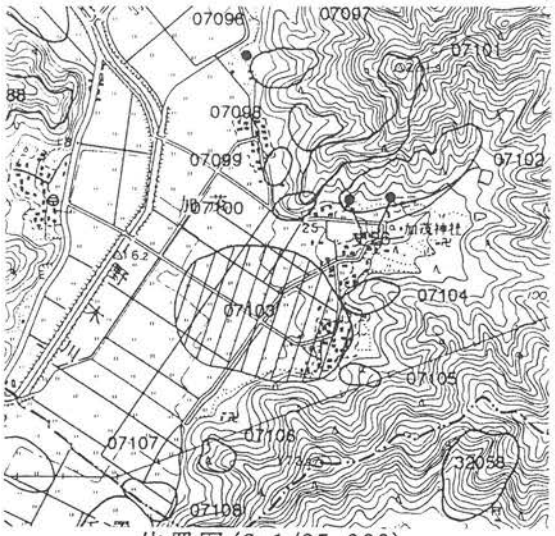


第３図　第２トレンチ　調査平面図　（Ｓ＝１／２００）

いちのつぼいせき

一ノ坪遺跡

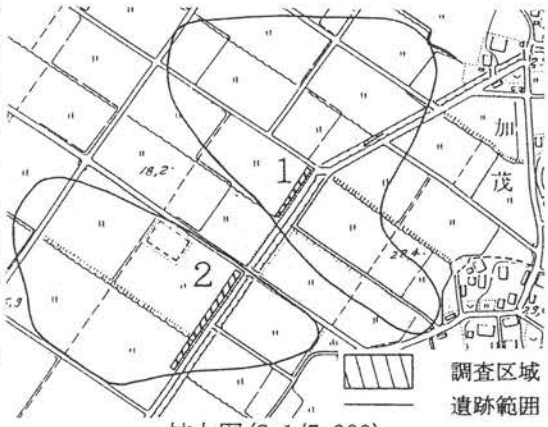
所在地：小浜市加茂
調査原因：県営担い手育成基盤整備事業
調査期間：平成12年6月26日～10月13日
調査主体：小浜市教育委員会
調査担当者：松川雅弘・鷲巣孔亮
調査面積：約550㎡
時代：弥生時代



位置図(S=1/25,000)

調査の内容

一ノ坪遺跡（福井県遺跡地図番号07103)は、小浜平野より北に伸びる宮川谷の最南部、加茂地区の小北・山田集落の西側に広がる水田地帯に位置しています。今回の調査は、道路拡幅工事のための事前調査で、南北方向に２本のトレンチを設定しました。便宜上、北側のトレンチを第１トレンチ、南側のトレンチを第２トレンチとします。本調査区は同地区を流れる小北川が形成した扇状地上にあるため、第１・第２トレンチの遺構面は、北から南に緩やかに傾斜しています。



拡大図(S=1/7,000)

第１トレンチからは層序を最大７層確認し、遺構は溝跡と土坑が検出されました。遺物包含層(土器が溜っている層)である第７層暗灰色粘質土層は、遺物包含層としては少なめの遺物量でした。溝跡の傍らからは、何らかの部材と考えられる長さ１ｍほどの板材が検出されましたが、土坑の内部には土器などの遺物は検出されませんでした。

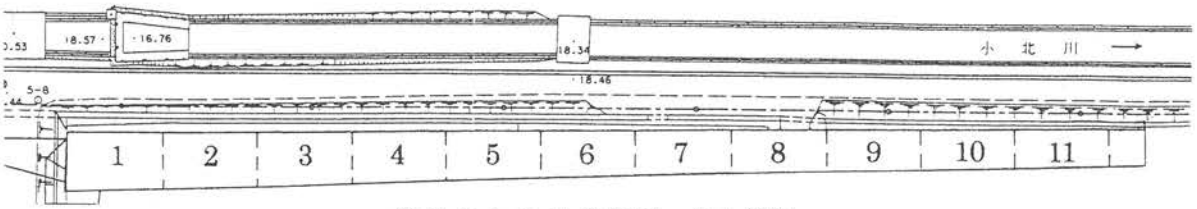
一方、第２トレンチからは建物跡２棟（建物跡１・２)を含む弥生時代後期の遺構と遺物が検出されました。これらの遺構と遺物は同トレンチの２区から４区の間に集中しており、建物跡２の南の溝跡（SD-01)からは弥生式土器がまとまった状態で検出されました。また、６区からも溝跡（SD-02)が検出され、底より木質遺物が数点と、弥生式土器が大量に検出されました。

調査の結果

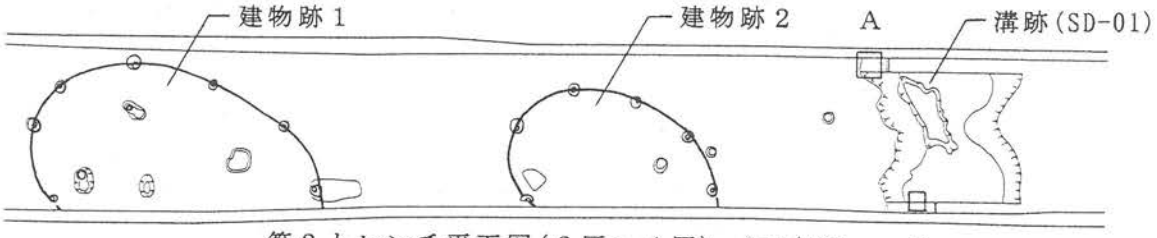
福井県遺跡地図は、一ノ坪遺跡を奈良時代～中世の遺物散布地であるとしています。今回の調査では、それらの時期の遺構と遺物は検出されませんでしたが、それより時代を遡る弥生時代後期の遺構と遺物を検出しました。加茂地区には、加茂北・南古墳に代表される加茂古墳群などの古墳時代の遺跡がありますが、その時代から少なくとも300年ほど遡る頃(約1,800年前)より、人々が加茂の地で生活をしていたことになります。

検出した弥生式土器は、近江地方の土器の影響を受けたものもありましたが、その多くは丹後地方の土器の影響を受けたものでした。つまり、当時から２つの物の流れが存在し、両地方から文化の影響を受けていたことが想像されます。特に若狭地方における丹後地方の文化の影響は大きかったようです。

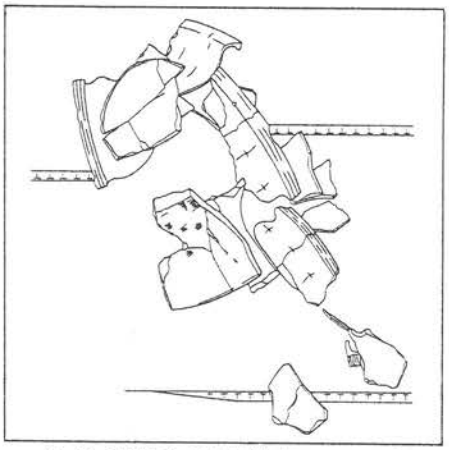
今回の調査のように、近年の小浜市の調査では、弥生時代後期の遺構と遺物の検出が増加しています。今後の課題として、個々の遺跡の検討を行うと同時に遺跡間の検討を行い、弥生時代後期の小浜市の様子を解明していくことが必要でしょう。（小浜市教育委員会嘱託　鷲巣 孔亮)



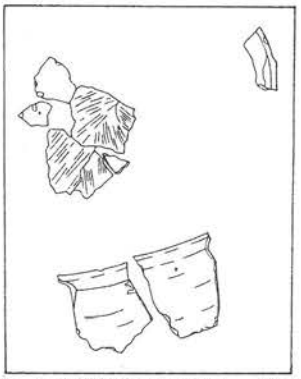
第２トレンチ全体図　S=1/800



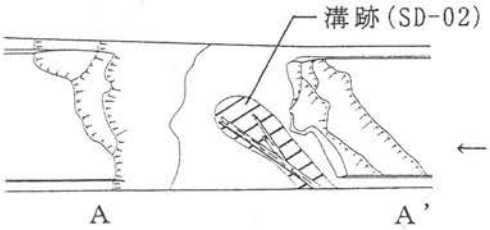
第２トレンチ平面図(２区～４区)　S=1/160



A地点遺物検出状況　S=1/8



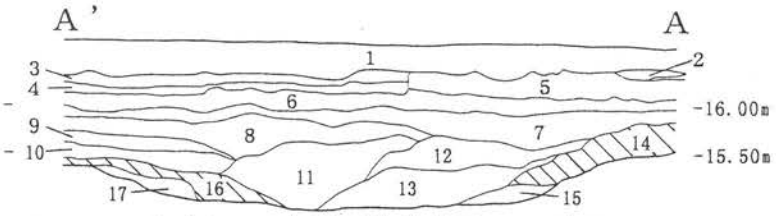
B地点遺物検出状況　S=1/8



方位(分層図を除く)

← 第２トレンチ平面図(６区)　S=1/160

弥生式土器が大量に検出された範囲



溝跡(SD-02)西側壁分層図　S=1/80

1. 橙茶色混礫土層
2. 灰色混礫土層
3. 灰色混砂土層
4. 茶灰色砂層
5. 灰色混礫土層
6. ３と同じ
7. 灰色混礫砂質土層
8. 灰色砂礫層
9. 暗紫灰色腐食土層
10. 濃灰色土層
11. 橙茶色礫層
12. ９と同じ
13. 灰茶色砂礫層
14. 緑灰色混礫土層(遺物包含層)
15. 濃灰色混礫土層
16. 暗灰色土層(遺物包含層)
17. 濃灰色粘質土層(上面が遺構面)

外街道遺跡

所　在　地　　福井県小浜市神宮寺
調査原因　　県道久坂中ノ畑小浜線道路改良工事
調査期間　　平成12年4月17日～平成12年6月20日
調査主体　　福井県教育委員会
調査担当者　　福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　　畠中清隆　佐治栄次
調査面積　　約600㎡
時　　代　　縄文時代　奈良・平安時代

調査の概要

神宮寺は小浜市を流れる遠敷川の河岸段丘上に位置し、現在も天文22年（1553）に朝倉義景が再建した本堂を残す天台宗の古刹である。同寺縁起によれば、和銅7年（714）に創設したと伝える。もっとも、8世紀初頭に確たる伽藍配置を持っていたかどうかは明らかではないが、同寺出土の瓦を見る限り、少なくとも8世紀中頃から後半には本瓦葺の建造物を伴う寺院が存在していたことは確かなようである。

本調査は遠敷川沿いを通る県道久坂中ノ畑小浜線の道路改良工事に伴うもので、平成11年度に拡幅工事が行われた際に遺物が出土し、遺構が確認されたため、擁壁及び側溝部分については立会調査とし、道路部分を今回調査することとなった。調査地はかつての神宮寺寺域の北縁及び東縁にあたると考えられるところである。調査対象域が南北に細長いため、便宜上、遠敷川の上流側よりA区、B区と二分して調査を行った。以下、遺跡について概略したい。

A区　この調査区は、調査に先行した立会い調査、分布調査時に縄文土器が散布していることが確認されていたところである。調査では、河岸段丘縁辺部の傾斜変換点付近で土坑などの遺構を検出したが、明確な包含層、遺構に伴う遺物は確認できず、時期は特定できなかった。

遺物は縄文土器（早期・中期）約80点、石器（磨製石斧等）約10点、布目瓦（古代）2点などが出土したが、緩斜面に堆積した褐色土に混在しており、二次堆積（自然堆積）と考えられる。しかし、遺存状態は良く、それ程移動いているとは考え難く、近くに縄文時代・古代の遺跡が存在するものと思われる。

B区　先の立会調査の際、鉄鉢を模倣した須恵器、少量ではあるが布目瓦が出土し、溝や土坑状の遺構などが確認されたことから、神宮寺との関連が窺われ、かつての神宮寺の寺域に含まれるものと考えられた。

本調査でも、溝、土坑、ピットなどの遺構を検出し、布目瓦・須恵器片などの遺物が出土したが、A区と同様に、明確な遺物包含層は確認できず、遺構も遺物が伴わないことから、検出した遺構が神宮寺に関連するものと断定するに至らなかった。ただし、立会調査の際に出土した鉄鉢形須恵器が埋められた状態にあったと考えられること、少量ではあるが布目瓦が出土していることから、調査区がかつての寺域の縁辺部、あるいは寺域の一部であった可能性が考えられる。

以上、本調査では縄文時代早期・中期、古代に一部重複して遺跡が形成されていたことが理解できたが、いずれも遺跡の中心からは外れていたため、遺跡の性格を知るには至らなかった。しかし、新たに小浜市域において山間部で縄文時代の遺跡が確認でき、しかも縄文時代早期にまで遡ること、神宮寺のかつての寺域が広範囲に広がる可能性が発掘調査で得られた意義は大きいといえる。

石山城跡

所在地	大飯郡大飯町石山
調査原因	近畿自動車道敦賀線建設事業
調査期間	平成11年10月5日～平成13年3月30日
調査主体	福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
調査担当	畠中清隆・鯵本眞友美・市原久資・川嶋清人・佐治栄治
遺跡の時代	中世

調査の概要

石山城跡は、大飯町を東西に流れる佐分利川の上流右岸に築かれた戦国期の山城です。石山集落の背後の山上にあり、佐分利川流域一帯を見渡すことができます。東は小浜市・西は京都府綾部市へと通じる道（現在の小浜綾部線）と、北は福谷坂峠を越えて高浜町・南は石山坂峠を超えて名田庄村・京都府美山町へと通じる道（現在の高浜周山線）とが交わる交通の要所にあたります。

石山城跡は、標高約190.5mの山頂部に設けた本丸を中心に、北東から南北に伸びる主尾根上に連続する曲輪（くるわ）群を築いており、西側の急斜面と北・南・東側の堀切（ほりきり）や竪堀（たてぼり）によって守りを固めています。堀切より外側の支尾根にも、小さな平坦部が幾つもつくられており、また、南に伸びる3本の支尾根のうち、中尾根と東尾根との間の谷部には館跡が見つかりました。

今回は近畿自動車道の建設に伴い、城跡の南側部分（主尾根の南端～南側の支尾根全域）と新たに確認された谷部の館跡が調査の対象となりました。調査にあたっては、調査区域を5分割し、主尾根部をE区、支尾根部の中尾根をA区・東尾根をB区・西尾根をC区、A・B区間の谷部をD区と呼称しました。

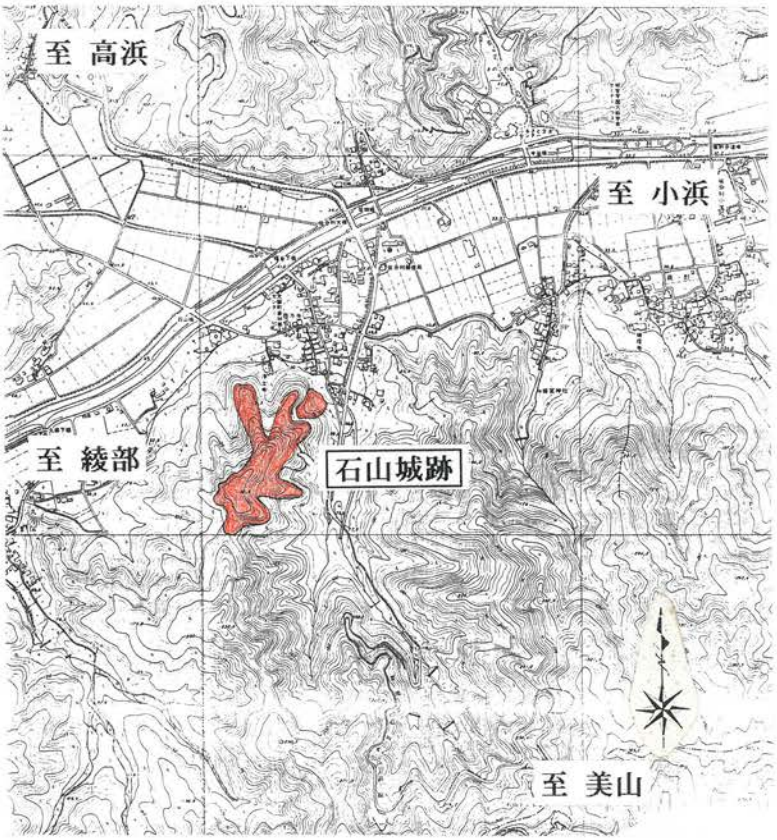
A～C区の支尾根部には、尾根筋や斜面を削り周りに土を盛って小さな平坦部が幾つも造られています。県道高浜周山線に面するB区には、尾根筋を境にして左右交互に比較的広い平坦部が造られており、それぞれ佐分利川下流と名田庄村へ抜ける石山坂の方向を向いています。B区の最上段平坦部から通路でつながるA区の平坦部群は、尾根筋上に造られた比較的広いものが中心で、佐分利川下流域を遠く見渡すことができます。佐分利川上流がよく見渡せるC区は、川を挟んで福谷集落の正面にあたります。C区には、尾根上付近だけでなく、少し下った斜面にまで尾根を取り巻くようにして平坦部が造られています。所狭しと造られたその数は、A・B区が15箇所未満であるのに対し、C区では40～50箇所近くにも上ります。また、B区の平坦部では土坑が1基、A区では焼土坑が1基、C区では投石用と思われる拳大の川原石の集積が4箇所で見つかりました。B・C区では焚き火の痕跡も見られました。

A・B 区の２本の支尾根は１本となり主尾根につながっていきますが、その主尾根部南端に造られている曲輪に至るまでに、傾斜が緩やかになる箇所があります。そこには、堀切１条とその直ぐ下から放射状に５条の竪堀が掘られています。C 区の支尾根と主尾根の間の痩せ尾根上にも、２重の堀切が掘られています。堀切は、３条とも底の部分が人一人歩けるくらいの幅の狭い箱型になっています。

堀切によって支尾根と画された主尾根部には、A・B・C 区の平坦部とは比べ物にならない規模の大きさで造成が行われ、曲輪が造られています。南端の曲輪の中央部分は、少し高く壇状になっており、４間×６間の礎石建物跡が見つかっています。また、建物跡の南部、には岩盤を削って壇状の高まりが造られており、その縁辺に３基のピットが見つかっています。

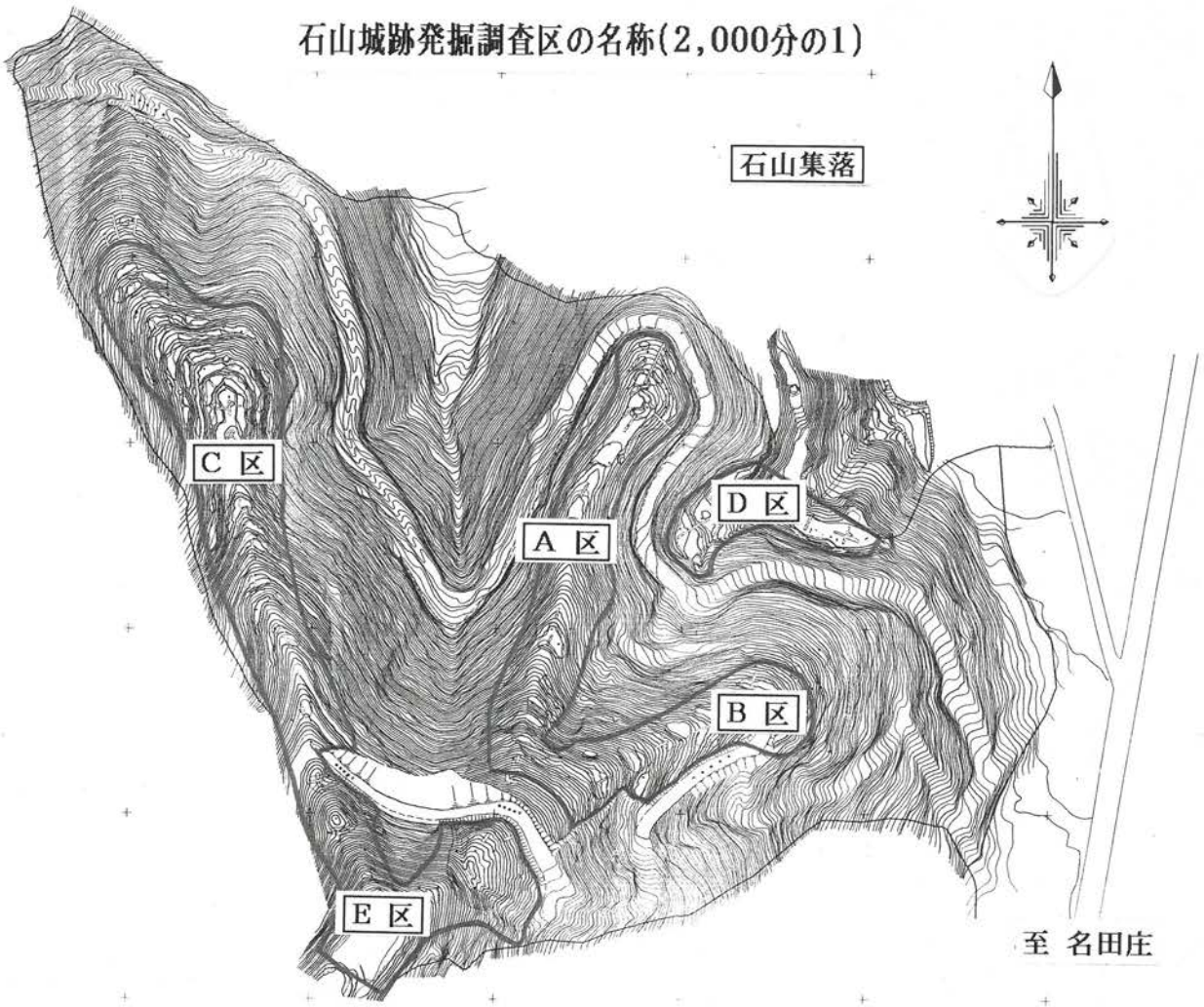
D 区では、谷地形を利用して大規模な造成を行ない、３段の平場が設けられていました。最上段には建物等の跡は見つかりませんでしたが、中段・下段ではそれぞれ礎石建物跡が見つかっています。中段では４間×５間の礎石建物跡が１棟、下段では西から順に３間×３間以上、４間×３間以上、４間×２間以上の計３棟の礎石建物跡と、建物跡に沿って並ぶ４基の土坑や水貯め用と思われる土坑１基などが確認されました。礎石建物跡のうち、中段と下段西側のものには岩盤を破砕した礫で床を貼る行為が行われていました。また、山から流れ落ちてくる雨水から建物を守るため、屋外には巧みに溝が掘られています。

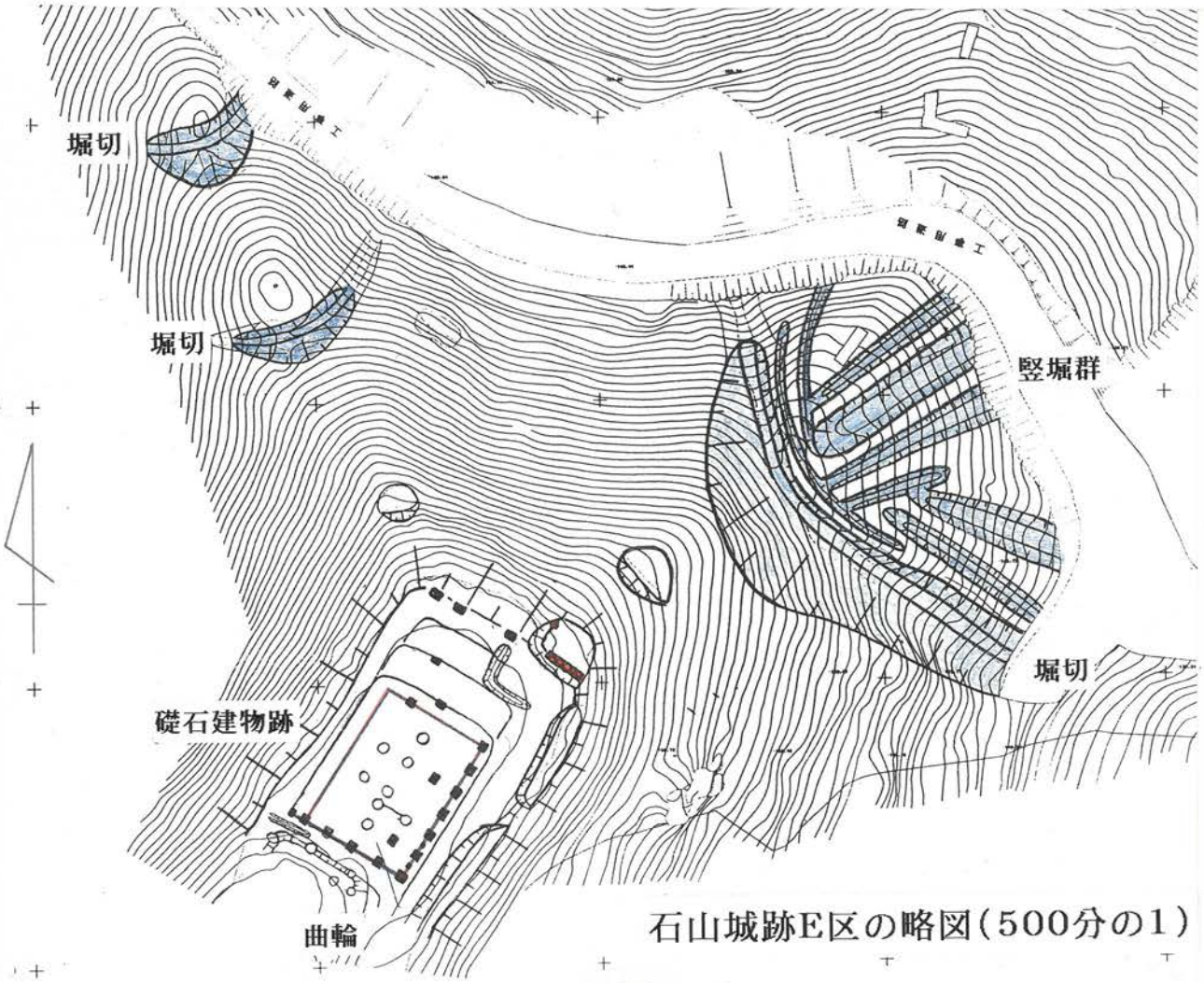
遺物は、陶磁器・土師皿・須恵器・古銭・刀子・鉄釘などが出ています。他に、D 区中段からは甲冑の小札（こざね）部分と巻貝が出ています。小札は革製のものと鉄製のものとが出ており、どちらも漆が塗られています。



石山城跡の位置（20,000分の1）

石山城跡発掘調査区の名称(2,000分の1)





石山城跡E区の略図(500分の1)

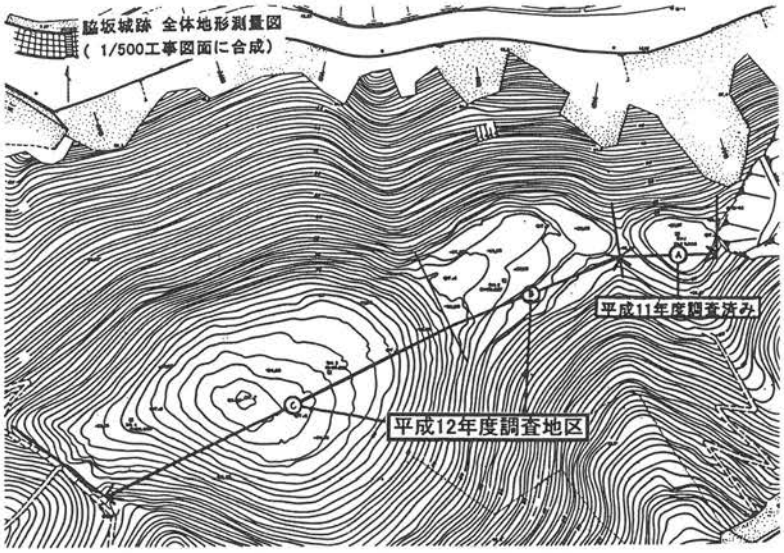
脇坂城跡第２次調査

所 在 地　　福井県大飯郡高浜町西三松脇坂地係
調査原因　　福井県による公園造成工事
調査期間　　平成 12 年 4 月 1 日（土）～5 月 25 日（木）
調査主体　　高浜町教育委員会
調査担当　　高浜町郷土資料館 技師 安倍義治
時　　代　　中世

◆周囲の環境

国道 27 号線、高浜町日置より主要地方道舞鶴・野原港・高浜線を内浦半島に向けて走り、2 つめのトンネルのほぼ真上を西端とし、尾根を東に下りながら所在する。最も高所で標高 87m を計る。

本城より北に位置する小黒飯集落の南方には「難波江城」が所在する。難波江城は「若狭郡県志」で『大草兵庫城址』と記されている。大草氏は三河国額田郡大草邑より興った一族であるが、本城とは目と鼻の先であり、両城の関係も考慮すべきところである。



脇坂城跡遺構全体図
(S=1/2000)

城はほぼ東西に細長く延び、平成 11 年の時点では全長 180m を計測する。現在、公園造成工事により先端から 70m ほどは既に削平済みである。

（参考）第 1 次調査概要(平成 11 年度)

脇坂城跡最先端部（自然崩壊により本来の先端部は欠如・上記地図の A 地区）は、最大長約 20m の隅丸三角形の最上郭と、1.4m ほど下で北側を除き取り巻く幅 1m 強の細長い郭、更に同程度下って同様の郭を持つ遺構である。範囲全体を全面発掘したが、約 300 点の出土遺物は殆ど近世陶器片で占められ、築城当時まで遡れる資料は皆無であった。また、西端の堀切からの出土は無く、柱穴も戦中・戦後の耕作のためか検出出来なかった。

結論としては、戦闘時に急いで築城されたが実際には使用されなかったか、単なる見張台的なものであったかの可能性が高いと思われる。

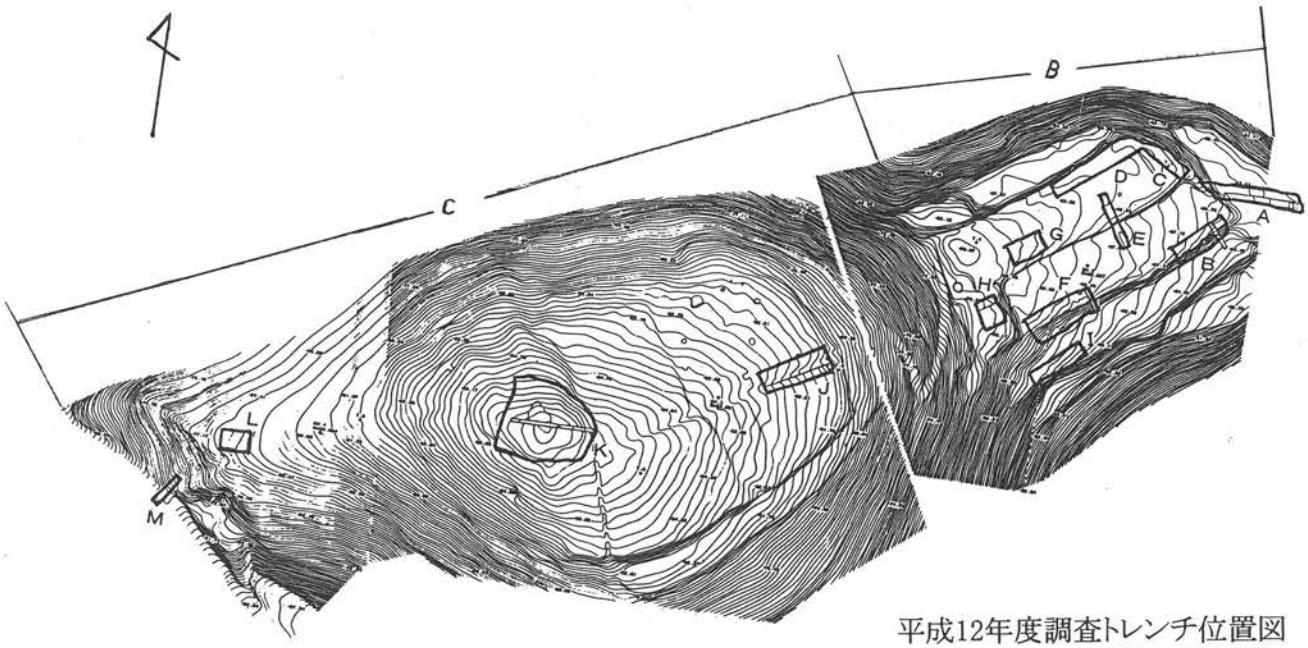
◆調査概要

昨年度に引き続いての調査で、城域全体のほぼ半分、面積約 4,000 ㎡を調査範囲としたが、発掘期間が 2 ヶ月という制限により全面発掘ではなく、13 箇所で計 330 ㎡のトレンチ調査を実施した。

１０分の１弱の非常に限られた面積での調査であったが、造成の方法、遺物検出とともに柱穴等の遺構確認を目的として実施した。

まず、平成 11 年度調査済区域西側より尾根上方に位置する B 地区は、大きい郭が連続していたこともあって 9 箇所のトレンチを設定した。また、調査地区最頂部（標高約 87m）は遺構の存在自体が疑問視されていた部分なので、尾根沿いの 4 箇所の設定に止めた。

調査は原則として地山を確認できるまで平面で掘り下げていったが、昨年と同じく上部は耕作によりほぼ全域に渡って掘り返されており、遺構の存在を示すような遺物や痕跡は認めることが出来なかった。ただ、最頂部周辺に縦横 3m ほどの集石遺構が発見されたのは予定外であった。石材の実測作業及び中心付近に縦割トレンチを入れてみたがその性格を特定するには至らなかった。



平成12年度調査トレンチ位置図
(S=1/1000)

◆出土遺物

中世山城に伴う遺物は昨年と同様皆無で、ただ、戦中・戦後の耕作関連の遺物（陶器片約　点）が出土したのみであった。また、集石遺構に伴うものとして須恵器蓋の破片が数点腐植土直下で出土した。直径約 16cm を計り、おそらく杯状の容器の蓋で中央に摘みのついたものであろうと思われる。時期的には 8～9 世紀頃と思われ、器種としては実用品とも言えるが、ここでの用途は祭祀に伴うものと考えている。

◆ま と め

調査対象である「中世山城」に関しては、遺物・遺構ともに特筆すべきものは無かった。さらに本城の城域であるが、城であることを証明する遺物・遺構が認められなかったことから推測するしかないのが現状である。

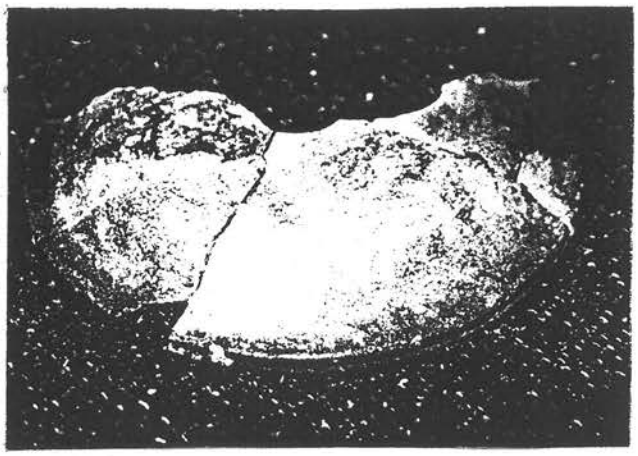
本来、城特有の郭や堀切、土塁といった遺構がほとんど見られない C 地区を含めて城域と考えたのは、最西端の落込みが城全体の背後（尾根上方）を守る堀切と考えられたからである。尚、この点に関しては有識者の「これは自然地形であり、城域は堀切がはっきりしている A 地区西端である。」とのご指摘もあった。しかし、現に存在している B 地区の多くの郭や C 地区の南端を取り巻く帯状の郭を単なる耕作のためのものとはどうしても考えられなかったのである。また、山城を築く立場で考えてみると、何も堀切が人工のものである必要は更々無いと思われる。そもそも戦時における人間の営みとして、最小の労力で最大の効果を求めることこそ自然であり、自然地形が堀切として活かせるならば利用しない手はなかったはずである。

また、当時の遺物、戦闘の記録、言伝えの類が皆無であることなどからここで実際に戦闘があったとは思えず、単なる見張台的なものであったか、築城途中で放棄された城である可能性が高いと判断している。

尚、集石遺構を含む C 地区最頂部は、他のほぼ全域で見られる畑作の痕跡が全くないことから、何らかの信仰の対象域であったと思われる。当初は蓋らしき須恵器片の出土もあって、経塚であるとの見当を付けていたが、ほぼ中心線に断割りを入れた結果埋納物や施設のあった痕跡が無かったことから、その可能性は低くなったと考えている。しかし、この場所は青葉山を仰ぎ見る位置にあたり、霊峰を遥拝する祭祀遺跡である可能性も考えられる。

平成 13 年度には今回入れたトレンチに直交するトレンチを 1 本入れ、さらに石材をはずして下層を調査する予定である。

集石遺構



出土須恵器